

0. 目次構成

〈序論〉
第1章 本研究について
1-1. 研究背景
1-2. 研究目的
1-3. 研究方法
1-4. 既往研究
〈本論〉
第2章 イヌイットの文化的変遷
2-1. はじめに カナダ先住民について
2-2. 極北地帯の文化的変遷
2-3. 1960年代前半
2-4. 1980-2005年
2-5. 現代
2-6. 考察

第3章 イヌイット・アートの歴史的展開
3-1. はじめに イヌイット美術の成立
3-1-1. イヌイット・アートの美的特徴
3-2. イヌイット・アートの歴史・展開
3-2-1. 前兆期
3-2-2. 黎明期
3-2-3. 展開期
3-2-4. 確立期
3-2-5. ポスト現代期
3-3. 考察

第4章 イヌイット版画が表現する世相
4-1. はじめに イヌイット版画について
4-2. 版画の表現に現れた変化
4-3. 考察

第5章 考察

第6章 結論

〈資料〉
イヌイットの版画コレクション

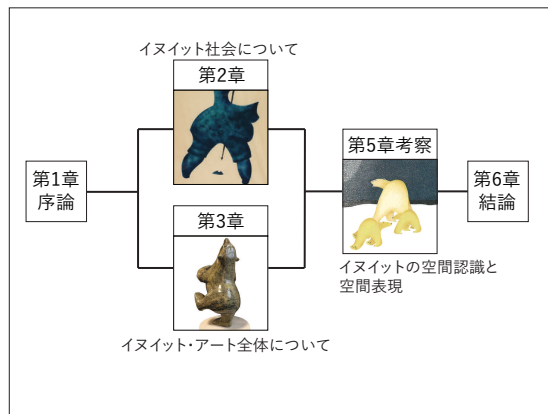


図1 論文構成

〈序論〉
第1章 本研究について

1-1. 研究背景
本研究の研究対象であるイヌイットは、紀元前4400年ごろからヨーロッパ人が到来する18世紀まで、地域特有の自然環境に根ざした伝統を熟成させていった。しかし、ヨーロッパ人によって18世紀後半から始まった毛皮取引に巻き込まれ、カナダの行政介入により19世紀後半には完全に政治経済的にカナダ国家に取り込まれてしまった。その中で、イヌイットの版画制作は、イヌイットの伝統的な生業である狩猟・漁猟にとって代わる新しい経済的基盤を確立することを目的に、1950年代に始まった。イヌイットが辿ってきた道のりは容易なものではなかったが、イヌイットは、版画制作を通して、独自の文化を継承すると同時に、過去とは違う生き方を確立したのだ。異民族の共生や文化の継承は世界のあらゆる地域で共通して考えなければならない課題であるが、本研究では、イヌイットを例に取り、この課題一般を考えるうえで足のかりとなるような知見を見出すことを目標とする。

1-2. 研究目的
第2章では、イヌイット文化に関する研究史をまとめる作業を通して、イヌイットとはどのような民族で、どのような独特な文化を形成してきたのかを明らかにする。特に、カナダ連邦政府がイヌイットの経済活動に積極的に介入を始めた政治・経済的背景の中で、イヌイットの生活が従来からどのように変化をしたのか、明らかにする。

第3章では、イヌイット・アートに関する研究史をまとめる作業を通して、紀元前2000年から現代までのイヌイット美術の流れをまとめ、欧米のドミナント社会との接触を通して発展してきたイヌイット・アートの全体像を把握する。また、イヌイット・アートの中でも、まだ研究が進んでいない分野を明らかにする。

第4章では、イヌイットの版画作品から、イヌイットの空間認識と空間表現の方法を考察する。

第5章では、イヌイットの版画制作には日本の版画の技法が生かされているため、日本とイヌイットの版画を比較する作業から、イヌイットが日本の版画技術から何を適用し、何を適用しなかったのかを明らかにする。

1-3. 研究方法
イヌイットは文字を持たない民族であったため、彼らによる文字の史料は残っていない。しかし文化人類学者や歴史家により、彼らの世界観や芸術品について多くの研究がなされてきた。本論文では、イヌイット文化、イヌイット・アートに関する研究史をまとめる作業を通して、イヌイットについて、まだ研究がされていない分野を把握する。また、イヌイットは文字は持たなかったが、多くの芸術作品を残しており、今も作り続けている。本論文では、それらイヌイット・アートの版画に着目して、彼らの独特な空間認識がどのように版画に現れ、彼らがいかに空間を表現するかを考察する。

第1章 序論
第2章 イヌイットの文化的変遷【文献調査】
第3章 イヌイット・アートの歴史的展開【文献調査】
第4章 イヌイットの空間認識と空間表現について【実見調査】
第5章 イヌイット美術と日本美術の比較との比較【実見調査】

〈本論〉
第2章 イヌイットの文化的変遷

本章では、ヨーロッパ人が極北地域に入ってくる前と後でのイヌイットの生活の変化、またそれを生じさせた要因、イヌイット・アートがどのようにして彼らの新しい生業になったのか、そして現代のイヌイットの暮らしまで、通史的に明らかにする。

2-1. はじめに カナダ先住民について
『1982年カナダ憲法』によると、カナダ連邦の先住民とは、カナダのインディアン、イヌイットおよびメイトイスである。イヌイットは、カナダのほか、極北圏に広く分布する民族だが、本論文では、カナダの極北圏に暮らす(暮らしていた)イヌイットを研究対象とする。

2-2. 極北地帯の文化的変遷
イヌイットの歴史は大まかに以下のように分けられる。
・インデペンデンス文化（おおよそ4000-3700年前）
・ブレ・ドーセット文化（おおよそ3700-2500年前）
・ドーセット文化（おおよそ2500-1000年前）
・チューレ文化（おおよそ1000-500年前）
・イヌイット文化（おおよそ500-現在まで）
イヌイット文化の特徴である犬ぞり、鯨などの大型海獣猟、陸海空の資源を縦横に活用する技術、様々な装飾を施した道具や衣服などはチューレは文化で出揃う。

イヌイット文化の中でも、後の第3章、第4章との関連が特に深い出来事を挙げる。

欧米人との遭遇(11世紀～)
11世紀から19世紀半ばにかけて極北地域にやってきたヨーロッパ人のタラ漁民、探検家、捕鯨者との接触を重ね、銃や鉄製品を入手した反面、イヌイット社会には結核、麻疹、風邪、梅毒などが持ち込まれた。

毛皮取引とキリスト教(19世紀半ば)
カナダ極北地域での欧米人による捕鯨が衰退した結果、その代わりにホッキョクグヰツネの毛皮を対象とする取引が盛んになり、イヌイットは欧米社会との経済的な関係を深めていった。

カナダ政府の政策とイヌイット経済の変遷(1939年以降)
1950年代、カナダ政府の政策方針は、イヌイットをカナダ国民としてカナダの主流社会に同化させることだった。1960年代半ばには、イヌイットの大多数が村の中に住宅を手に入れ、住むようになった。そして第二次世界大戦後、北極圏の経済的需要が高まりを見せたことにより、以下のことが生じた。
①イヌイットの国民化
②イヌイットの国民化政策の一環として、イヌイットの中に産業を興して現金経済を浸透させる可能性が感じられた
③彫刻の制作と販売の奨励の関心の高まり

二つの経済——狩猟・漁猟と賃金労働
イヌイットは狩猟民であるというイメージが広がっている。しかしながら、2005年の時点のイヌイット社会で、狩猟と漁撈だけで生活を営んでいるイヌイットは存在しない。1950年代からイヌイットの経済は、狩猟や漁撈、罌猟を中心とする生業志向経済から生業活動と賃金労働からなる混交経済へと移行していった。

2-3. 既往研究から見るイヌイット社会の変化(1960-2005年)
文化人類学社によって、1963年と、1980年から2005年にかけて、イヌイット社会でフィールド調査が行われた。それによると、1963年までは、私たちがイヌイットと聞いて一般的にイメージする「生肉を食べる」、「雪の家で暮らす」、「犬ぞりで狩りに出かける」などのイヌイットらしい伝統文化が残っていた。しかし、2008年には、それらの光景はほぼ失われてしまっていた。

1960年代前半
1960年代前半に文化人類学者の本多勝一氏がイヌイット社会の様子を現地取材し、朝日新聞に報告している。それによると1963年のイヌイット社会の様子は以下の通りである。
・狩猟・漁撈による自給自足の生活
・犬ぞりで、数日間かけて狩猟・漁撈に行く生業
・家族10人で8畳程度の雪の家に暮らし、生肉や汚物の臭いが充満する「異臭の家」で生活
・食事は、お腹が減ったときに生肉をぶった切って食べる。

1980-2008年
1980年から2008年にかけて、文化人類学者の岸上伸啓氏と武田剛氏による現地取材が行われた。それによると、伝統的なイヌイットの生活は一世代にしてほぼ失われていた。2008年に武田剛氏が本多勝一氏と同じフィールドで調査をした際、イヌイットの生活は以下のようなものになっていた。
・地球温暖化で気温が上がり、雪の家が作れなくなり、4LDKの一軒家に、ソファ、42型の大型テレビがある生活
・狩猟・漁撈では生計が立たなくなり、生活保護を受けている
・猟に出る時はスノーモービルを使用
・ピザや缶詰の食品など南部から入ってくるファストフードを好む若者が多い

第3章 イヌイット・アートの歴史的展開

本章では、イヌイットが制作してきた、美術史家が「工芸」として扱う1950年以前に作られたアートのなものと、1950年代以降の「真正な芸術作品」までの歴史を概観する。

3-1. はじめに イヌイット・アートの成立
イヌイット・アートとは、主にカナダ北極圏に住むイヌイットの人々が作り出す芸術の総称である。しかし、イヌイット・アートはイヌイットの間には太古からあったものではない。イヌイット・アートは、1950年代以後にカナダのイヌイット社会と欧米のドミナント社会が続いてきた様々な接触を通して構築されてきた概念である。
ここでは、イヌイット・アートという概念やその特徴が生まれた歴史的経緯を見るために、イヌイット・アートの歴史の概観と、それが形成されてきた経緯を見ていく。

3-2. イヌイット・アートの歴史・展開
イヌイット・アートの歴史は「先史時代」、「歴史時代」、「現代」に整理される。さらに「現代」は、イヌイット・アートそれ自体の展開とイヌイット・アートをめぐる政治・経済的状況の変化に従って、以下のように整理することができる。
①前兆期(戦間期～1940年:様々な先駆的実験と行政組織の関心)
②黎明期(1950年代:様々な芸術様式の導入と普及)
③展開期(1960年代:実験、品質維持、販売網の整備)
④確立期(1970年代:イヌイット・アートの「正統性」の確立)
⑤成熟期(1980年代:エスニシティの表徴へ)
⑥ポスト現代期(1990年代:第三世代の挑戦)
「現代」の①～⑥の各時期に作られたイヌイット・アートの詳しい動向は第4章で見ていく。

「現代」の中でもイヌイット・アートは特に、ジェームズ・ヒューストンが初めて北極圏を訪れた1948年に転換期を迎える。

ジェームズ・ヒューストンと日本とイヌイット版画の関係
ヒューストンの奨励活動は、従来の毛皮取引が1940年代に毛皮価格の下落によって衰退したときに、イヌイットの経済的基盤を確立することを目的に行われた。カナダ連邦政府がイヌイットの経済活動に積極的に介入するという政治・経済的背景の中で、ハドソン湾会社、カナダ工芸品ギルド、カナダ連邦政府の依頼と資金の提供を受けて行われた。ヒューストンは1958年10月

から1959年1月に来日し、創作版画の巨匠平塚運一に師事し日本の版画技術を学んだ。来日中、平塚運一、棟方志功、柳宗悦、渡辺禎雄、森義利、岡村吉右衛門らとの交流を通して学んだ日本の版画技術は、帰国後、イヌイットの版画制作に生かされた。

「現代」期のイヌイット・アートの動向

①前兆期(戦間期～1940年代):様々な先駆的実験と行政組織の関心

カナダ内陸省が、毛皮市場の変動に變動に左右される毛皮交易に代わる産業をイヌイットの間に誕生させる必要性に迫られていて、工芸品奨励への興味を1920年代から持っていたことが指摘されている。1930年代から、宣教師が、イヌイットに彫刻を作らせて現金収入を得させる試みを展開し、1940年代には、合衆国空軍基地向けにイヌイット彫刻を作らせ販売する試みが行われていた。この時期に作られたアートはあくまでも「工芸」とみなされ、美術館や画廊で販売されることはなかった。

②黎明期(1950年代):様々な芸術様式の導入と普及

第二次世界大戦が終結し、極北圏の経済的重要性が高まり、イヌイットの国民化が急務となった。そうした国民化制作の一環として、イヌイットの間に産業を興して現金経済を浸透させる可能性を秘めた彫刻の制作と販売の奨励に関心が集まった。ジェームズ・ヒューストンが1949年から1955年にかけて極北で奨励活動を行い、この時期にヒューストンによって版画という新しいジャンルが導入され、以後、彫刻と並んでイヌイット・アートの代表的なジャンルの一つとなってゆく。1955年には、イヌイット・アートのための流通・販売網が初めて確立された。

③展開期(1960年代:実験、品質維持、販売網の整備)

ヒューストンなどの初期奨励者たちの活動を基礎に、さらに多彩な試みが展開される。カナダ連邦政府はイヌイット・アートの奨励に積極的に関与するようになり、多くの「工芸プロジェクト」が次々に企画されて実行された。美術の専門教育を受けた多数のアドバイザーが派遣され、その指導のもと様々な奨励活動が展開された。

④確立期(1970年代:イヌイット・アートの「正統性」の確立)

「展開」期に、今日見られるジャンルと諸様式がほぼ出そろったイヌイット・アートは、美術館で「芸術」として展示されるようになり、「芸術」としての地位を国際的に確立してゆく。また、このイヌイット・アートを媒介に地域集団を超えたイヌイットの団結が促進されるような動きが見られるようになってゆく。

⑤成熟期(1980年代:エスニシティの表徴へ)

先の「確立」期に確立されたカナダを代表する「芸術」としての芸術が決定的になる一方で、経済的重要性の低下が著しくなった。欧米ドミナント社会での美術市場でイヌイット・アートは飽和状態となり、その売れ行きは落ちていった。この時期になると、イヌイット・アートは外部に向けて自己イメージを発信し、若い世代に「伝統」を伝えるための媒体としての性格を持つようになった。

⑥ポスト現代期(1990年代:第三世代の挑戦)

イヌイット・アートは「ポスト現代期」で経済的重要性をほぼ完全に失い、もっぱら自己イメージ発信のためのメディアとして重要な役割を果たすようになる。

第4章 イヌイットの空間認識と空間表現

本章では、1950年代から制作が始まったイヌイットの版画に用いられた技法から、イヌイットの空間認識と空間表現の仕方について考察する。

■調査対象物

- ・国立民族学博物館に収蔵されている版画
- ・北米北方先住民関連文化資源データベースに登録されている版画
- ・エスキモー協同組合のコレクションに登録されてる版画

■はじめに イヌイット版画について

イヌイットの版画は、カナダ人画家のジェームズ・ヒューストンの奨励により1950年代に入ってから、イヌイットが現金収入を得るため欧米ドミナント社会に輸出するために制作されてきた歴史的経緯がある。

ヒューストンは、イヌイットの版画制作に、日本の浮世絵システムを導入した。これを採用したことが、イヌイットの伝統的世界を無理なく現代美術に結びつけた。ヒューストンが「芸術家たちが優れた原画を生み出し(中略)印刷自体は、別の人間が担当する(中略)移動を日常とする北極圏での生活や、紙の供給、色付けに必要な熱などの条件を考え、私は浮世絵のシステムこそ、自分たちに最もふさわしいシステムだろうと感じた」と述べたように、浮世絵のシステムを採用することで、移動しながらバラバラに暮らす人々の才能や技術を寄せ集め、彼らの生活をそのまま維持しながら作品を生み出すことが可能になった。

■イヌイットの空間認識と空間表現

イヌイットの版画は、写実性に欠け、透視図法などは用いられず平面的である。そして、一枚の作品の中に複数の視点が存在する。図2は、犬橇を横からみた様子と犬橇が走っている氷を上から俯瞰した様子が一枚の作品の中でバラバラに配置されている。通常イヌイットは、西洋世界の伝統的なものの見方では自然や事物を見なく、彼らの視点は上から水中を見下ろすようだったり、下から空飛ぶ鳥を見上げるようだったりする。イヌイット独特の空間の捉え方を生かし、イメージをバラバラにして空間に配置することで、彼らはそれぞれのモチーフに重要性を与えるという手法を持った。

また、イヌイットは解剖学の達人で、漁師特有の鋭い観察眼を備えている。彼ら自身完璧に理解しているリズムの中で動物や人間が動く姿を力強く表現して見せてくれる。彼らは、毛皮や羽毛のパターン、骨格の構造、筋肉の動きに通じ、からだを揺すって歩くホッキョクグマの歩きぶり、セイウチの重さ、アザラシの滑らかさ、ガンの飛翔のリズム、さかなの神経質そうな動きに通じており、動物の周りの空間を認識している。これらはみな、彼らの生活の血や肉であり、彼らの版画に、平面性、複数の視点性、モチーフをバラバラに配置することで、たくみに表現されている(図3,4参照)。



図1 Bear Hunter On Sea Ice



図3 Bear Hunter On Sea Ice



図4 Bear Hunter On Sea Ice

第5章 考察：日本美術との比較を通して

イヌイットの版画と日本の版画には深い関係がある。本章では、イヌイットが、自分たちの版画に日本の美学の何を取り入れたのかを考察する。日本人とイヌイットの版画における技術的側面の類似点はNorman Vorano氏によって既に詳細な考察なされているため、本章では、日本人とイヌイットの美学的観点から、両者の版画技術の類似点と相違点に着目する。

■日本の絵画・版画の美学的特徴

- ①平面性: 切り捨ての美学
- ②余白の美学
- ③複数の視点
- ④移ろいの美学
- ⑤動物の表現

■イヌイット版画と日本の版画・絵画における共通点

①平面性

イヌイットは背景を描く必要に拘束されたり、透視画法の面倒な規則に縛りつけられたりはしなかった。また、イメージをばらばらにして空間に配置することでそれぞれに重要性を与えるという手法を持った。

③複数の視点

通常イヌイットは、西洋世界に伝統的なものの見方では自然や事物を見ない。彼らの視点は上からの水中の魚を見下ろすようだったり、下から空飛ぶ鳥を見上げるようだったりする。

⑤動物の表現

イヌイットは解剖学の達人で、猟師特有の鋭い観察眼で、彼ら自身が完璧なまでに理解しているリズムの中で動物や人間が動く姿を力強く表現して見せてくれる。

■イヌイット版画と日本の版画・絵画における相違点

②余白の美学

ジェームズ・ヒューストンの*Eskimo Prints*の挿絵であるWalrus Huntと、実際のWalrus Huntを見比べると、*Eskimo Prints*では版画の余白に文字情報が挿入されている上にハンコの位置が移動されている(図5,6参照)。

④移ろいの美学

イヌイットが暮らす極北は一年中雪に覆われている大地であるため、移ろいの表現されなかったのだろうと考えた。彼らの版画には、イヌイットが捉えたあらゆる動物たちと真っ白な大地が捉えられている。

第6章 結論

1. 日本美術とイヌイット美術、二つの美術を並べてみることで、既往研究では指摘されていない、日本美術とイヌイット美術の美学観点における相互関係を指摘することができた。

2. ジェームズ・ヒューストンがイヌイットに新しい経済的基盤を確立させるために、版画を学ぶ国としてどうして日本を選んだのか、既往研究では指摘されて来なかったが、足掛かりとなる考察をすることができた。

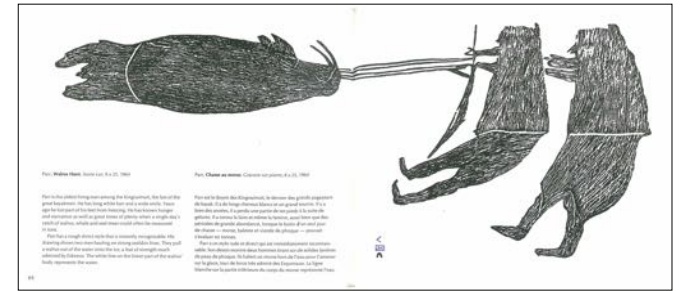


図5 Eskimo Prints

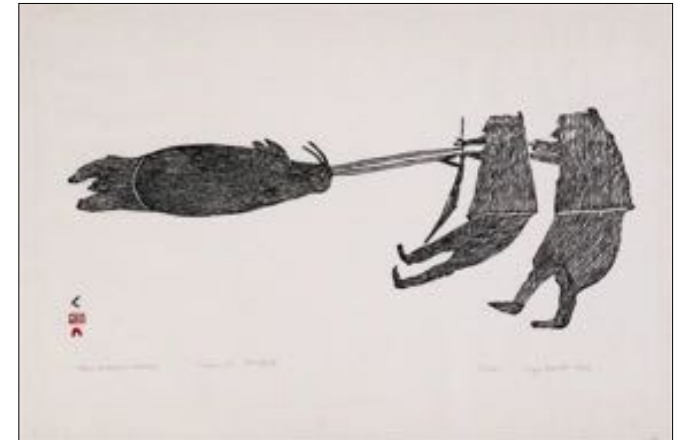


図6 Walrus Hunt

■参考文献

イヌイットについて

- ・James Houston, *Confessions Of An Igloo Dweller*, Boston: Houghton Mifflin, 1966.
- ・本多勝一『カナダ・エスキモー』朝日新聞社,1963
- ・岸上伸啓、『極北の民 カナダ・イヌイット』弘文堂,1998

イヌイット・アートについて

- ・Ed. Canadian Museum of Civilization, *In the Shadow of the Sun: Perspectives on contemporary native art*, University of Ottawa Press, 1993.
- ・Ingo Hessel, *Inuit Art An Introduction*, New York: Harry N. Abrams, Inc., 1998.
- ・国立民族学博物館(編),『自然のこえ 命のかたち:カナダ先住民の生み出す美』京都:昭和堂,2009
- ・大村敬一「イヌイット・アート:イメージをめぐる交渉と実験の場」斎藤玲子『国立民族学博物館調査報告』国立民族学博物館,2015
- ・小林正佳「イヌイット・アート:イメージをめぐる交渉と実験の場」斎藤玲子『国立民族学博物館調査報告』国立民族学博物館,2015

■図版出典

図1 筆写作成

図2 Norman Vorano, with an essay by Asato Ikeda and MingTiampo, and contributions from Kananginak Pootook, *Inuit Prints: Japanese Inspiration: Early Printmaking in the Canadian Arctic*, Canadian Museum of Civilization Corporation, 2011, p.81.

図3 Dorset Fine Arts
URL: <http://www.dorsetfinearts.com/2007-print-col-lection> (2020.1.2閲覧)

図4 Dorset Fine Arts
URL: <http://www.dorsetfinearts.com/2001-print-col-lection> (2020.1.2閲覧)

図5 James Houston, *Eskimo Prints*, Barre, MA: Barre Publishers, 1967, pp.88-89.

図6 MutualArt.
URL: [https://www.mutualart.com/Artwork/Men-Pulling-a-Walrus/A4BAA4A5D94881E6\(2020.1.2閲覧\)](https://www.mutualart.com/Artwork/Men-Pulling-a-Walrus/A4BAA4A5D94881E6(2020.1.2閲覧))